

私の震災体験と共創研究センター

相馬 弘年

My Own Experience of 3.11 Earthquake and Research Center for Creative Partnerships

Hirotoishi SOUMA

*Department of Basic Sciences, School of Science and Engineering,
Ishinomaki Senshu University, Ishinomaki, Miyagi 986-8580*

相変わらずの猛暑を従え、震災から2度目の長い夏が終わろうとしている。この一文は、厳密な事実報告でもなく、さりとて単なる感情を吐露したものでもない。震災以後の共創研究センターの取組については、いろいろな公の場で、報告してきた。ここでは、震災体験をふまえて個人としてどのように共創研究センターの活動と向き合ってきたかを、あまり整理はされていないと思うが、できるだけ率直に記録として残すものなんらかの意味があろうと考えた。

地震が起きたときには、1号館の研究室に居た。本棚からは本が落ちるし、テーブルの上に積んでいた印刷物やファイル類の山が落下し、これまで経験した事のない強烈な揺れが長時間続いた。それでも、この揺れは結構迫力があるなど思った程度であった。その後は、比較的危機感・緊迫感もなく、事務部の指示に従い統制を乱さないことのみに留意し、自由行動の許された午後7時半すぎごろ大学から国道45号線に出て、旧北上川を介して大学の対岸にある我が家に戻った。心配して同行してくれた当時平成23年度卒業予定の小川君が帰りの道すがら必要に応じて車から降り、情報収集に当たり、何事もなく自宅に帰りついた。自宅は大地震の後の乱雑な状況に加え、床上浸水による泥がフローリングを覆っていた。小川君は我が家に留まることを固辞し、大学から歩いて数分程度のところにあるアパートに向かって徒歩で戻っていった。我が家は平屋の一戸建てで、その夜は明かりのない暗闇に一人でベッドに潜りこんでいた。目が覚めて何かの気配を感じてベッドの下に手をやると、何と、ひたひたと水が上がってくるではないか。一切の抵抗を許さない圧倒的な自然の猛威に慄き、夢中でベッドから飛

び降り膝までの水を掻き分け、少し高台にある隣の森さんの家に逃げ込んだ。その夜は高台に移動した愛車のなかで過ごし、朝を迎えた。この闇夜の浸水が68年間に亘るささやかな私の人生における最大の恐怖体験となった。

おりしも、この大震災・福島原発事故と絡め、社会的、地理的、時間的に限界のないリスクとグローバル化した現代世界を覆う閉塞感について、ドイツの哲学者の論考が新聞紙上において紹介されていた。かなり無頓着な私も、自然災害、人災に関わらず、我々の身の回りはグローバルな意味でのリスクが充満しているということを身にしみて感じるようになった。つまり、この恐怖体験によって、自然災害と同様に、何人といえども個人的に対抗することなど及びもつかない強大な社会的、あるいは、政治、経済的に限界のないリスクが現代世界に蔓延していることを実感するようになった。ここで、リスクに対する根源的な対処法に係わるキーワードとして、飛躍していると思われるかもしれないが、「謙虚―共生―感謝」という言葉が私の脳裏から離れなくなった。本学のミッションである社会に対する報恩奉仕の根源的意味とも相通じるのではないかと思うに至り、震災直後の比較的早い時期から、「謙虚―共生―感謝」が共創研究センターと向き合う際の私個人としての思考の源泉となった。

スリーマイル島、チェルノブイリと続いた原発事故は、とうとう地震津波を伴い福島まで蔓延してきた。福島原発事故の真の原因は何か。この問いに答えるのはなかなか難しい。しかし、「謙虚―共生―感謝」と無関係とはとても思えない。誤解を恐れず少し私見を述べてみよう。脱原発について、野田首相は原発ゼロをめざすとしつつ

も、閣議決定は骨抜きにした。対する安倍総裁は、原発依存は減らしていく、しかし、今ゼロを言うのは無責任だとしている。これら二つの主張は、原発の対症療法としては異なっているように響くが、脱原発依存という視点からすれば、同一である。ただし、我が国の電力業界、経済界は、米国などと同様明らかに原発維持を主張している。枝野経済産業相は、原発を使って経済成長を目指す国が安全を中心とした日本の技術に期待したいという時、日本が協力しないのは無責任だとし、ロシア・ウラジオストクで開かれたアジア太平洋経済協力会議（APEC）首脳会議で、原子力利用の重要性を再認識する合意文書をまとめた。

ここで危惧されることは、どこまで根源的な意味で問題を掘り下げているかである。残念ながら、「謙虚―共生―感謝」が声高な主張の原点となっているとはとても思えない。根源にもどり、冷静、沈着に哲学、倫理、文明論を含めた幅広い視点に立った論理の再構築を図り、今こそ問題解決に向けて大胆かつ果敢に実行に移すことが必要ではないだろうか。

しかるに、大震災に見舞われた石巻地域の真ただ中に立地する本学として、将来に向けた取組は一体どのようなものでなければならないのであろうか。地域の復興と同時に、科学技術と持続可能な社会の、あるいは大学と市民生活の、共生関係の再構築といった中長期的難問にもいち早く取り組む必要があり、平成 23 年 3 月末の学部長会の議を経て、坂田学長主導のもと 4 月に「復興共生プロジェクト」がとりあえず発足した。復興共生プロジェクトでは、理工・経営両学部、共創研究センター、大学開放センター、さらに、経営学部「地域活性化研究会」等が主体となり、地域とともに復興を目指すため、実績があるプロジェクトや震災関連事業からスタートすることとなった。震災後に取り組んだ主な事業を以下に示す。

- 石巻市からの「大学地域連携事業補助金」助成と従来から実施されてきた方向性の異なる 3 種の研究助成、すなわち IS 奨学研究助成、IK 地域研究助成、石巻専修大学研究助成との綿密な整合性を諮りながら研究助成を実施した。
- 石巻専修大学経営学部「地域活性化研究会」（構成員は経営学部教員）は、この地域の震災

からの復旧・復興に貢献することを目的として、実態調査、関係機関などへの提言、問題解決のためのプロジェクトの検討、企画プロジェクトの実施などを遂行した。

- 平成 23 年度文部科学省（平成 23 年度大学改革推進等補助金）「大学等における地域復興のためのセンター的機能整備事業」に採択され、以下の 2 事業を実施した。

事業名①石巻専修大学における復興共生プロジェクト推進のためのセンター的機能整備事業

②復興大学（ワンストップ・サービス・プラットフォーム）

- 石巻専修大学と一般社団法人日本家政学会による「東日本大震災生活研究プロジェクト」を遂行するための協定を締結した。

石巻市と石巻専修大学との地域連携事業である石巻市からの「大学地域連携事業補助金」助成による研究プロジェクトは、共創研究センターによる取りまとめを経て、3 月の大地震発生から約 3 ヶ月半後に立ち上がった。各研究テーマは、継続課題も含め、復興や大災害に対する備えに關しての貢献を目的とする研究が中心となった。中間発表の場として、平成 24 年 3 月 17 日（土）・18 日（日）の両日にわたり「共創研究センターシンポジウム～共生社会をめざして～」と題したシンポジウムが開催され、石巻市からの総合講演、招待講演を交えて、今後の発展を見出す活発な議論を引き出す機会として位置づけられた。なお、本シンポジウムの副題の必要性が今野常務より指摘され、坂田学長提案による「～共生社会をめざして～」が直ちに採択されたことを付記する。

ここで、平成 23・24 年度の石巻市からの「大学地域連携事業補助金」助成による研究プロジェクト・サテライトキャンパス企画を復興共生プロジェクトにかけける全学的な思いの一端として、是非、記録に留めておきたい。

平成 23 年度共創研究センタープロジェクト事業

【研究プロジェクト】

石巻専修大学・東日本大震災デジタルアーカイブ制作のための調査研究

代表：理工学部 教授 綾 皓二郎

経営学部 教授 佐々木万亀夫

理工学部 講師 川村 暁

大震災の記録や証言、それから得られる教訓、さらに地域の復旧・復興への思いや提案などをデジタルアーカイブとし、石巻圏域の復旧・復興支援の一助に繋げる。多様な形式での一次データの集積と公開に向け、予備的調査研究を行う。

牡鹿半島に生息するニホンジカの北上ルートの解明

代表：理工学部 教授 土屋 剛

理工学部 教授 根本 智行

理工学部 教授 柴田 清孝

大日本猟友会宮城県猟友会

石巻支部・支部長 永松重信

牡鹿半島に生息するニホンジカは、北上川を越え生息域を北へ広げている。甚大な農業被害を未然に防ぐため、シカの遺伝子解析を行い、北上する母集団の生息地を特定し、この母集団に狩猟圧を集中的に加えることにより、北上を阻止する。

石巻地域における東日本大震災後の教育および教育支援に関する調査研究

代表：理工学部 教授 根本 泉

理工学部 教授 山崎 省一

理工学部 教授 工藤すばる

理工学部 准教授 指方 研二

理工学部 特命教授 近藤 裕子

大震災は小・中学校の教育現場にも大きな影響をもたらした。様々な角度から震災後の地域の教育の在り方を検討し、教育力の向上に貢献するための調査・研究を行う。

換金作物による農地の塩害および重金属汚染の除去ならびに農家の収入確保に関する研究

代表：理工学部 教授 鈴木 均

理工学部 教授 福島 美智子

自営業（専業農家）小山 桂典

津波により農地は塩害をこうむると共にヘドロによって汚染され、沿岸の農業は壊滅的打撃を受けた。植物栽培による環境修復の手法を用い、農地回復の実現可能性を探ると共に、新たな食材の生産基地としてその農地利用する可能性を見いだす。

東日本大震災の被災地石巻圏における復興初期のボランティア・ツーリズムの円滑な実施のための条件の研究

代表：経営学部 准教授 丸岡 泰

経営学部 特命教授 大森信治郎

本震災でのボランティア参加者、団体等の性格・行動・動機、中間組織の役割、現地コミュニティへの影響等を把握することを試みる。阪神・淡路大震災など大規模な災害時に現れたボランティア活動との比較を念頭に置いて調査を進める。

東日本大震災の津波による自動車災害の発生状況調査

代表：理工学部 教授 山本 憲一

理工学部 教授 川島 純一

理工学部 教授 若月 昇

今回の震災では多くの車両が津波に流され、亡くなった方も多い。車両は最初浮きそして沈む。従来水上に落下した場合、出来るだけ早く脱出することが求められていた。しかし津波の場合、最初から車を捨てるのが良いのか、どのような状態で車両から脱出するのが最良なのか？また車両はどのようなアシストを運転者にあたえればよいのかを考えたい。

石巻ボランティア情報センターの設立・運営による石巻市復興支援の実証的研究

代表：経営学部 教授 栗山 規矩

経営学部 教授 大坂 良宏

GREENHEART (NPO)

教育ディレクター Allwright Gavin

石巻災害ボランティアセンター

コーディネーター 田畑 豊史

石巻専修大学 大学院生 伊藤 壽朗

経営学部 助教 舩井 道晴

石巻市はその多くが壊滅的被害を受け、復興にとってボランティア支援は不可欠となった。被災地とボランティアとのニーズを収集・整理・発信し、ボランティアの継続的な支援を可能にする情報センターの運営方法を実証研究する。

生活活動量を基軸とした健康介入プログラムが石巻市高齢者の健康管理度と自己効力感に与える影響

私の震災体験と共創研究センター

代表：理工学部 准教授 山内 武巳
東北大学大学院教育情報学研究部

教授 北村 勝朗
理工学部 客員教授 時光 一郎
石巻市健康部健康推進課 庄司 勝彦
石巻市健康部健康推進課 高橋 由美
石巻市健康部健康推進課 石川 和江
石巻市健康部健康推進課 遠藤美由貴

石巻市と石巻専修大学による疾病予防と健康増進の連携事業として ISU 健康支援プログラムを提供する。本プログラムは運動、スポーツにこだわらずに日常生活活動の活動量を増やすことに重点を置いた健康教室であり、石巻地域における生活習慣予防施策への貢献が期待される。

有用海産微細藻類の大量培養法に関する応用研究

代表：理工学部 教授 佐々木 洋
理工学部 准教授 太田 尚志
スメーブジャパン社長 原 芳道
スメーブジャパン社員 平岡 正明

数種類の海産微細藻類は細胞内に有用な化学成分を効率よく蓄積する。それらの抽出物を利用した E P A 生産、バイオ燃料生産に対する期待が高い。前年度の基礎的実験成果を通して実用化に向け、現実的環境条件の中で大量培養実験を試みる。

エンジョイ・スーパーサイエンス

代表：理工学部 教授 丸岡 章
理工学部 教授 鈴木 均
理工学部 教授 佐々木 洋
理工学部 教授 相馬 弘年
経営学部 教授 阿部 康一
理工学部 准教授 輪田 直子

高校生を対象に、“自ら学ぶことのたのしさ”を体験してもらうため、日常の高校の授業と異なる独自の教材に基づいた教育プログラムを実施する。

【サテライトキャンパス企画】

復興活動の関係者の状況報告と意見交換とを目的とした“共生プラザ”の開催

代表：大学開放センター長 教授 若月 昇
経営学部 准教授 李 東勲
理工学部 客員教授 斎藤 方達

街づくりまんぼう (株) 西条 充敏
専修大学人間科学部教授 大矢根 淳
石巻専修大学同窓会会長 伊東 孝浩

目的が同じであっても活動場所や活動時期が異なることが多い。震災を乗り越えて直面した課題に対して、復興・再生・創設に向かって取り組む活動グループが気軽に現状を話し合い、それをどうかいつすればよいのかを、石巻専修大学の教員などがコーディネートするワークショップにより、「実践的な活動の場」を提供する。地域住民の立場から望まれることに対しての共同活動であります。したがって、皆様の希望によっては本プログラム以外のことも加えて参ります。なお、まちの若い方の勉強会になれば幸いに存じます。

平成 24 年度共創研究センタープロジェクト事業
「研究プロジェクト」

災害時のエネルギー源としての水素燃料電池の試験運用

理工学部准教授 恵原 貴志
理工学部准教授 指方 研二
理工学部教授 吉原 章

放射能の長期モニタリングに適した生物の検討

理工学部教授 松谷 武成
理工学部教授 根本 智行
理工学部教授 福島 美智子
東北大学名誉教授 秦 正弘

震災からの石巻地域における企業再生実態調査－電子書籍による次世代への提言－

経営学部教授 岡野 知子
経営学部准教授 田村 真介
理工学部講師 川村 暁

小船舶の停船時横ゆれ防止装置の開発

理工学部教授 高津 宣夫
理工学部教授 若月 昇
理工学部教授 亀谷 裕敬

(株)千葉鉄工所 取締役 千葉竜太郎

東日本大震災で被災した企業の事業継続策に関する産学金連携による実証的研究

経営学部准教授 李 東勲
経営学部准教授 石原 慎士
石巻信用金庫 常勤理事 高橋 誠一

相馬 弘年

山徳平塚水産株式会社
代表取締役社長 平塚 隆一郎
株式会社木の屋石巻水産
営業部主任 鈴木 誠
理工学部准教授 鈴木 英勝
大学間および地域間交流を目指したワンセグ用番組制作プログラムの開発
経営学部教授 湊 信吾
経営学部准教授 益満 環
経営学部助教 舩井 道晴
専修大学ネットワーク情報学部
教授 福富 忠和
講師 藤原 正仁
石巻コミュニティ放送株式会社
営業部長兼技術部長 今野 雅彦
常務取締役 高須賀精一郎
取締役相談役 鈴木 孝也
富士通インテリジェントサービス本部
企画開発部マネージャー 辻村 仁志
企画開発部プロジェクトリーダー
山本 充彦
大型客船寄港による歓迎イベントの企画・運営及び地域への経済波及効果の測定
経営学部特任教授 清水 義春
経営学部教授 丸岡 泰
経営学部助教 庄子 真岐
石巻市建設部河川港湾室
主任主事 及川 英明
有用海産微細藻類を用いた大量培養の効率化に関する研究
理工学部教授 佐々木 洋
理工学部准教授 太田 尚志
(株)スメーブジャパン研究員 平岡 正明
(株)スメーブジャパン社長 原 芳道
ニホンジカの牡鹿半島系北上ルートと五葉山系南下ルートの解明
理工学部教授 土屋 剛
理工学部教授 根本 智行
理工学部教授 柴田 清孝
大日本獺友会宮城県獺友会
石巻支部支部長 永松 重信
「サテライトキャンパス企画」
I S U健康支援プログラムの石巻地域への展開

理工学部准教授 山内 武巳
東北大学大学院教育情報学研究部
教授 北村 勝郎
理工学部客員教授 時光 一朗
石巻市保健福祉部健康推進課
課長 伊藤 慶子
技術主幹 高橋 由美
技術主幹 石川 和江
技術主幹 遠藤美由貴
被災地復興応援「詩」募集プロジェクト
理工学部教授 山崎 省一
理工学部教授 足立 岳志
理工学部特命教授 近藤 裕子
理工学部非常勤講師 永山 貴洋
理工学部非常勤講師 佐藤 誠子
理工学部非常勤講師 保原 和子
理工学部非常勤講師 渥美 佳子
遊びを通して地域がつながる ～こどもの遊び場づくりと地域づくり～
理工学部教授 大谷 尚文
経営学部准教授 山崎 泰央
石巻復興支援ネットワーク
代表 兼子 佳恵
理工学部准教授 廣瀬 裕作
石巻復興ネットワーク
事務局長 渡部 慶太
にじいろクレヨン
代表 柴田 滋紀
プロジェクト結 理事長 長尾 彰
プロジェクト結 理事 中川 綾
エンジョイ・スーパーサイエンス
理工学部教授 丸岡 章
理工学部教授 鈴木 均
理工学部教授 佐々木 洋
理工学部教授 相馬 弘年
経営学部教授 阿部 康一
理工学部准教授 輪田 直子
各研究プロジェクトは、途中経過や成果について様々な形式で公表する義務がある。多様な意見を封印せず、異なる意見や感情が多く集まる場として石巻専修大学研究紀要への投稿が有効な発表の場として期待される。震災復興には、複合的な課題が多くあるため、それぞれについて、復興に

向けた具体策をまとめるとともにお互いの連携を深めることも重要である。しかし、机上の論議は可能であっても、一步現場に身を置くと、各課題について整合性を確保しつつ将来を見通すことは極めて困難であり、長いいばらの道を覚悟しなければならない。石巻市、女川町、東松島市、登米市等連携自治体との実効的協力体制の深化や他大学・学協会との継続的支援体制の構築を図りつつ、地域社会・企業の復興支援に資する大学の研究・開発力の向上を支えることも今後の重要課題となること必定であろう。理工学部の新設、人間学部開設により総合大学へと向かう本学は、社会に対する報恩奉仕の根源的意味を深化

し、東日本大震災から多くのことを学んでいくことであろう。

最後に一言申し上げたい。復興、自然災害、原発、経済、領土問題等多大な国難に遭遇している今こそ、根源にもどり、冷静、沈着に論理の再構築を図り、大胆かつ果敢に実行に移す発想の転換を大いに期待したいところである。

共創研究センターの活動では、尾形孝輔事務課員をはじめ事務部の奮闘に負うところ甚大であります。ここに、心から敬意を表するものであります。